

2008年(平成20年)5月2日(金曜日)

地球文化

関 雄二

中米のグアテマラは、古代マヤ文明が栄えた場所として知られる。世界文化遺産として多くの観光客を集める遺跡ティカルに加え、2005年には、世界無形遺産のリストに、グアテマラ中部、パツハ・ベラパス県ラビナル市のラビナル・アチの踊りが選ばれている。

やかな衣装をまとった主人公たちは、二つのマヤ系民族集団の対立や、先祖との交流を演じる。スペイン人が登場しない点や語りの形式などから、起源は征服以前にさかのぼるといわれる。実際に1625年には上演が禁止され、以後、19世紀の半ばにフランス人宣教師が記録を残すまで、200年以上も秘儀として伝えられた。世界遺産に選ばれた今でも、

舞踊劇伝承に人類学貢献

観光化にはあまり積極的ではない。この舞踊劇団を率いる人物によれば、伝承に役立ったのは、義父からの知識ばかりで

当の本人たちがそう信じているのだから、これを簡単に否定することには慎重になるべきであろう。しかし、それ以上に興味深いのは、文字記録が舞踊劇の保存に役立っている点である。対象文化を一方的に描く点で、植民地支配者と同列であると批判されてきた人類学者の研究が、現在の人々の儀礼やアイデンティティのより所になっているのである。

ラビナル市のコミュニティ・ミュージアムの展示室が、この踊りばかりでなく、1996年まで続いた内戦下で虐殺された人々の写真と証言で埋め尽くされている様子を目にすると、社会復興に文化が必須であることを感じさせてくれる。儀礼や舞踊の記録を残すだけでなく、現地社会の人々とともに活用を考えていく、そんな時代が来ているのかもしれない。(国立民族学博物館教授・文化人類学)